

写真集『それでも私は飛ぶ—翼の記憶 1909-1940』と ミニ企画展「航空黎明期の写真展—それでも私は飛ぶ—」について

日本航空協会 航空遺産継承基金事務局

本年3月、『それでも私は飛ぶ—翼の記憶 1909-1940』という写真集を上梓いたしました。判型は257×257mmという少し大きめの非定型サイズで、全128ページ、写真ページは二色刷となっています。すでにご覧になった方もおられることと思いますが、「写真集にしてはちょっと変わったタイトル?」と思われる方も多いのではないのでしょうか。本稿では、この写真集の編集の経緯をご紹介します、合わせて国立科学博物館で3月に開催した写真展についてご報告いたします。

● 写真集のテーマ決定

当協会の航空遺産継承活動では、写真資料の保存処置の一環としてデジタル化を進めています。そして、その成果の公開と航空遺産の魅力や価値を紹介するために、写真集の発行やウェブ・ギャラリーの作成をしています。これまでに発行した写真集には、故・宮原旭氏が遺されたアルバムから写真をチョイスした『男爵の愛した翼たち』上・下巻（2006年・2008年）があります。

『男爵の愛した翼たち』を発行した後に、故・郡捷氏と故・小森郁夫氏という戦前戦後を通して活躍された航空ジャーナリストのコレクションをご寄贈いただき、また民間航空のパイオニアとして有名な故・伊藤音次郎氏の写真アルバムをデジタル複写させていただくなどして、さらに多くの写真資料が集まり、そこには画質の良い鮮明なものも多く含まれていました。そこで『男爵の愛した翼たち』に続く出版物として、これらの中から写真をセレクトして写真集を編集・発行したいと私どもは考えました。写真のセレクトに当たっては、当然テーマが無ければなりません。そこで、航空遺産継承基金の専門委員であり『男爵の愛した翼たち』の編集にも携わっていただいた藤原洋氏と藤田俊夫氏にご相談したところ、「航空史を写真で綴る本は色々あるけれど、航空に関わる人々の生き生きとした姿を紹介する写真集はまだ



『それでも私は飛ぶ 翼の記憶 1909-1940』

ないから、そういうものはどうでしょう」という提案をいただきました。そこで、航空黎明期からの日本人と航空機の関わりをテーマとすることにしました。

テーマが決まったことで、写真集の編集が本格的に始まりました。「まえがき」を藤原氏に、写真解説を藤田氏にお願いすることとし、全体のアートディレクションを『男爵の愛した翼たち』に引き続いてデザイナーの柳沢光二氏にお願いすることといたしました。

● 写真のデジタル化とセレクトについて

写真アルバムのデジタル化は、処理のスピードや解像度を検討した結果、基本的に600dpiで行うことにしています。また、モノクロ写真も、写真が伝えている被写体の質感などを適切に再現するためにグレースケールではなく24bitフルカラーでデジタル化し、TIFF形式で保存しています。

今回の写真集に使用した写真は、これまでに当協会に寄贈されたアルバム100冊以上、写真枚数では2万枚以上の中からテーマに沿って写真をセレクトしました。写真のセレクトは、上述のテーマに沿って、被写体が航空史の重要な一コマかどうかではなく、パイロットたちの時に厳しく時にほのぼのとした表情を捕らえた写真や飛行機を見守る観衆の興味津津な様子や興奮・感動など伝える写真をメインにしています。

● 写真集の体裁とタイトル

今回の写真集の編集に当たって私どもが特に留意したことに、写真が本来持っている魅力を読者にしっかり伝えたいということがあります。そのため、写真の印刷は、ブラックとセピア系の特色を使った二色刷にして、オリジナルのプリントのグラデーションをできるだけ再現するようにしました。また、写真のページは撮影年月日と撮影地のみ記載し、写真解説は巻末にまとめることとしました。

セレクトされた写真は、撮影日順に掲載することにしたのですが、アルバムに撮影日が記録されていない写真も多くありました。そこで、民間機の登録記号を調査してこられた藤田氏と柳沢氏の資料を提供していただいたり、戦前の航空史に詳しい横川裕一氏に情報を提供いただいたりして、撮影日を特定したり、特定が無理な場合には撮影時期を絞り込んでいきました。写真の掲載順がほぼ決定し写真集全体のレイアウトが出来た段階で、この写真集のタイトルをどうするか、藤原氏と藤田氏、柳沢氏、当事務局職員長の長島、荻田が集まりアイデアを出しあった中で選ばれたのが『それでも私は飛ぶ』でした。セレクトされた写真が描き出していたのは、初期の飛行機に付き物だった様々なトラブルに怯むことなく大空へ挑戦し続けた人々の姿だったからです。

写真データは柳沢氏にチェックしていただき、写真自体の魅力を尊重することを原則として、写真に付着してそのままスキャンされてしまった糸屑などを削除するなどの必要最小限の処理のみを施していただきました。個々の写真は現像時の処理やこれまでの保存状態によって、セピア色への変化などにバラツキがありましたが、印刷をお願いした三美印刷(株)で全体としてトーンが揃うように調節をお願いしました。また、テキストはポール・トンプソン氏に英訳を依頼して和英併記とし、航空史に興味を持つ世界中の人たちに楽しんでいただけるようにしています。

このようにして、写真集『それでも私は飛ぶ — 翼の記憶 1909-1940』はできあがりました。



スキャンしたアルバムのページの一例。大きさは約27×約32センチ。



『それでも私は飛ぶ 翼の記憶 1909-1940』の74～75ページ

● ミニ企画展

「航空黎明期の写真展 —それでも私は飛ぶ—」

写真集の発行とちょうど時を同じくして、上野にある国立科学博物館(以下、科博)の地球館2階において、標記の展示会を本年3月26日(火)～4月7日(日)の約2週間、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所(以下、東文研)とともに開催しました。この展示会では、東文研に寄贈された所沢の喜多川写真館コレクションの写真338枚を国立情報学研究所連想情報学研究開発センターの協力を得てタッチパネル式の65インチ液晶ディスプレイで展示し、合わせて写真集から抜粋した写真をパネルにし、当協会が所蔵している航空遺産(木製プロペラ、航空カメラ、写真アルバム、航空計器など)を展示いたしました。小中学校の春休みの時期だったため、科博は親子連れなど多くの見学者が訪れており、この展示会を目当てに来館された方も含めて多くの方に見ていただくことができました。なお、現在、65インチ型液晶ディスプレイで紹介する喜多川コレクションは所沢航空発祥記念館に展示されています(8月末までの予定)。



タッチパネル式の65インチ液晶ディスプレイでは喜多川写真館のコレクションを表示しました。



写真パネルとケースに収まった展示品の様子。